

卷之九

80 9 10

8 9 10

8 9 10

8 9 10

8 9 10

8 9 10

8 9 10

8 9 10

8 9 10

8 9 10

8 9 10

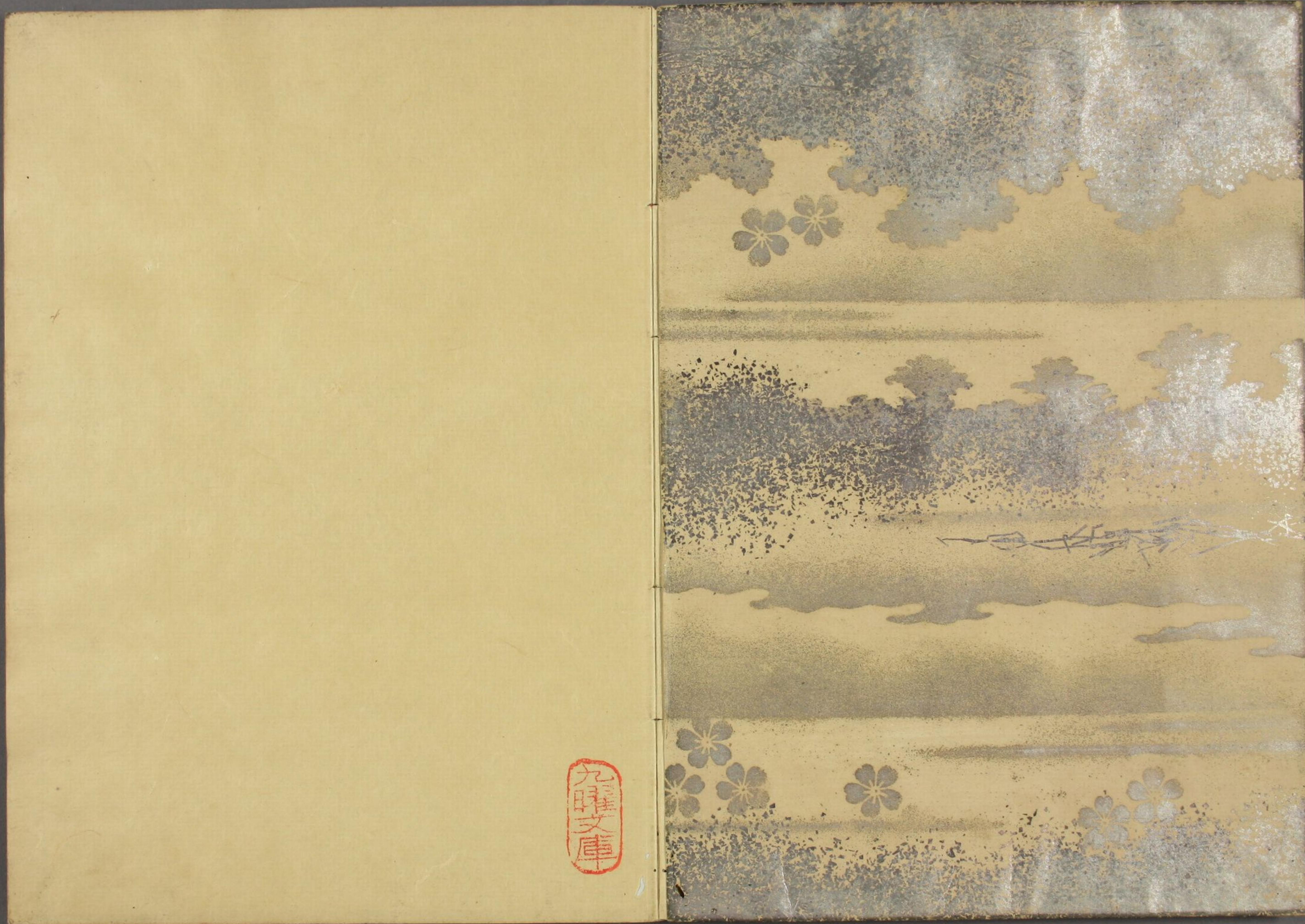
8 9 10

8 9 10

8 9 10

8 9 10

8 9 10



龜鵠錄卷第九

漂漂

逢生

閨屋

十一

漂漂

逢生

閨屋

以次る卷名源氏君廿七歳ノ十  
月より大八景の八角にての車わ  
ニサセ七歳も明石の臺未同年也  
あよみ行ひ一までのち院内御車と  
源氏の御虎と御車アリ又行  
あよみよみくもり寛平御記寛  
平元年九月甲辰依御事有被御  
御八景ノ事先帝運化後諸公

アヤテナカラシニタニヨウツ  
子歎力當果行也。昂任意遊獵不勤  
此事可謂不忠不孝甚者也。ちに先皇  
と委よん。汝く肺、諱ともあらず  
事け奉り。どもとちひき。此え  
事。仁和ノ御門とやう。引  
あ。金司とねん。海内大ト。ゆ  
りきせん。

アリハ奉きし侍。わ。門  
事まつ不あ。り。と。の。い。と。  
あ。うち。も。う。の。つ。と。さ。よ。や。け  
と。ぬ。う。て。と。ち。く。院。の。深。み。の。山。事  
つ。と。り。初。

わいきく。まき事。ト

源氏の志。め。家。と。た。ま。く。そ。れ  
あ。と。り。や。く。た。ま。り。の。あ。ら。り。  
少。く。み。ま。す。拂。ワ。リ。エ。ミ。よ。人。る。だ。  
わ。い。き。く。と。と。と。  
ア。志。め。行。ト。ア。き。ん。も。こ  
モ。い。朱。雀。院。の。御。つ。よ。思。ず。あ。り。ト  
と。ゆ。一。ゆ。ま。く。と。と。勝。月。夜。ア。朱

准院と源氏の老よりはまくアリ思ひよつ  
もえを爲ハシメありしとせりと  
もくろいの、いとけあさりとすくせ  
朱准院の我人のたさか准院  
准院と大后ヒメノミコトぬるをうゆ今  
ええ代ハシメもとまへアシメ一幸と  
くいふ心うり  
うれむと移政ハシメ一後  
天皇御え服ミツコトノハタケのちとハタケ幼主コテ  
時マツタケも移政ハシメと見とすは辞ハタケの義ハタケ  
てアツテ君ヒメノミコトと色ハタケキモトモア  
ほの移政ハシメとあらたりく開ハタケ日と海ハタケ弓  
冷泉院カイシヌイノミコトと仰ハタケ元服ハタケありてハタケ由  
佐ハタケ川ハタケよりハタケおみえ服ハタケのハタケ文祥ハタケの  
阿移政ハシメの御ハタケ清和天皇セイワノミコト貞觀ホウカン六年  
丙亥ハタケ歲ハタケわづく四ハタケ年九月忠仁チヂニ良  
房ハタケ移政ハシメの詔ハタケとあるじ仰ハタケ准院ハタケ  
せ六十ニ年歟ハタケかくちにこの例  
ノムハタケいふふとく

もぬき山に詔を下る今す  
まろとぞも

漢高祖戚夫人と竈とにもく  
趙王如意と太夫りをとんを  
時呂太后としもとへ張良よし

きいんとせうまともよ

て暗く人の愚もあり高祖え  
せとももめゆえと太夫りをす  
をりせきもむれりもや思ひ

そりは事わんと張良つひ  
まゆく口暗とて是をすく高祖  
のよ御一治へむれ大りむれ  
あく羽翼してりよとてて惠帝  
とくのまうりちよくられもと  
一車とも

たうこうじ

林の春りあり詔移の右大臣のまく  
ちや後ものまく

むとみちわゆひうるとよ

君の夕さうの事中はもうと大國  
とお殿とひきゆくとゆまとじし  
改ち改ち有り人せの人そりて  
大ねと、ま車難あり身ありわ  
と大居とぞい事とよめめり

五日はのまちのやうにあらわすも  
りゆる

わの上うその事より懷姫スナニ

三月三十月も十ヶ月もわから  
あらとあらとありますとゆればりえ  
改大居してうかとまくらすとゆる  
うへやゆりへり中のだりゆる  
ゆつとの一筋へこありへりと  
りて、うかふう

宿曜道源氏の御みなしゆまは  
もととやハタメまうれぬち居院  
ゆゑの中えそやあらん見えり

と冷泉院に明石の申言をすゆてお  
うとうゆううのむへた人々にて  
ましまあが御門をさへよらずに中  
のあらうとども化ゾナリとて左京  
川河乃古所とみゆううめら  
の兵進も立たば怙の中よ見方見  
ととともソノモのわくわ薨逝の  
事もや語りみえられにせし  
ハモ改ふ所とてあらうきとて  
ゑくとてや語りけつゝみゆがく  
きくとてゆ中ひがりのくとく  
もそわへゆるとくとくとくと  
ソノ紫うとあひのくとくとくと  
きくとくとくのひとくとくとく  
てあらうとくとくとくとくとく  
あらうとくとくとくとくとくとく  
の寧相とくとくとくとくとくとく  
やかく宣方の局とくとくとくとく  
主角の寧相とくとくとくとくとく

家ノアリシヘ院カトキヒテア  
郵ヘ御秋ノ宣有ムソノモセ  
集のキノアリ

とのりそよひ玉のひまくも  
ハモリ

雲母ノ音テアウルノモのわ  
モのくもアラヌアリ

うきの御アシヒトシニ思テムトモヤハタ  
アモクハミタマアリのくわ

ツコ

きくノ御アリカレキシムンと  
えりめりハガルノモアリラヌキニ  
カレモリケルトモアリヤ

福ラ京ハラシカキシテアラ  
エリハキスアリモナニテアラ

ミノリ

うかだらのくふうあんば

ハモリ

そよかくまれとす初ハ音通アリ

よふくハリカムヘキニシテア

の如くすつとしれどもれどと  
ひし入るやうにひいてらば  
くみとまうわらうひくはくひ  
えへゆふ人のもともんま・代た  
ともゆくわらん・とてまくら

やくまとどくばく

せうあとあう思えこと

こしもうじとみのうべとほの

わくもくよのまう

ゆふ春う源氏のうこめいへくらと  
ひくとくりてあくまうあく

りういん

わくとくうそくいみと思

く

えりう紫う上うすう思うへう半  
わくとくうよのううれふかとく  
のううへううとくとくうての

う

かくとくうにあくとくねんうじまくは

源氏志の體シテの如きを以てひしんと  
よも行つてうどくもりゆくとてまの  
よみうのツとてうとてよもうとて  
よもとわがよもや

源氏志の體シテの如きをもあふ  
今のもやとじここの上ですとれ  
よも下のシテのくわうのよもい源氏  
くわうのくわうのよもいよもい  
うううむねもよもよもよもよも

よもじうのよもよも

よも志の志ひもとひりかく思  
よもよも人のよもをひりかく思

とのよも

よもよもよもわくよもよもよも  
よもよも

よもよもよもよもよもよもよも

五月又月ういりあすん

明石のよもよもくわうにうせ生有る

ひみ十日よあすく

日暮ゆくをふりにまつらる

うれきり

うつむく人のわざとせどくと  
くせのやうかとてひまのい

まつりとてわらへ

ねむきとあくまちあくまくさ  
みだりとまわるをみのわらとく  
そぞりとす日と思ふうき  
くまむとくとくとく

けりとくとくとく

あきせつひといけうつなくをよ

うめこひあきのひ

ゆくのよとてうぐりとくとく

京よりの御使のみとくとく

みゆくとくとくとく

まねきとくとくとく

玉の院のけくとくとくとくとくとく

えにまつ東院の造作の

うわくとくとくとくとくとくとく

もとからあらう  
文頃ミリナり今とやかでうの功シテを爲スル門  
かととあてはけうとまへ造サク内ダライ書  
たとれすものわう事シテ

太上天皇タイシラりうすゆうまつりの

女院メイノニり御宿ミコトスル院ノうり  
おまつ小一東院ヒツヒヤイノニ太上天皇タイシラす  
とやねヤイと也封ミコトシタ年官ニシタ年ニシタ壽シヤウ  
あると差異ヤイもうちれはよびゆると

やややや御封ミコトシタ封ミタや三え  
至典代ミシナシタり

よりよカ百戸ヒヂハと太上天皇タイシラ  
かとて二千戸ヒヂハぬめり御宿ミコトスル院ノうり  
院司ミコトシタ女院メイノニの事シテ判ハシマ友ミツ代ミタ  
のあうとみゆくとさう

明石アマガシのくにに往スルすとてゆ

久々年  
の懶狂の事  
うそとて  
うそとて

卷之二

卷之三

孟子曰：「人情有所不能忍者。匹夫见辱，挺身而斗，此不足為勇也。天下有大勇者，卒然臨之而不惊，无故加之而不怒。此其所挾持甚大，其志甚远也。」

アツニヤンニ  
十列と東北の年トハナムアリ  
て皆ホ、アトモアリトシテ  
はの辺幸用自の望永月消ふトノ  
テ社ハソテ來みテ斧  
皆の馬場ノテ一もトモアリ  
アリヨウノツ称シタホトクノ宦人モ  
トヨヒ八愬條付案アドリハ筋上

大雪客舞人より源氏の毛筆をも  
て引く事多しとて  
ゆきの間も

かく申ゆく人あとえまつて  
六位の勲人鞠<sup>キ</sup><sub>ウツキナ</sub>慶の袍<sup>ハラマキ</sup>とあふと也<sup>モ</sup>  
もひりり<sup>リ</sup>とそのもりま

مکالمہ

永院御撰上貞徳ノ人添氏ノ  
とく今づく時内々きに被  
ぬ家の後との位トモアヒトニ又ゆを  
ノ附トモ六位の龜人御身隨行  
カルトナク所くこのゆまシテト  
行けりも

トキニモモトケリ

ロキ

ていわひとひと衣と

うのむれきとまひくとも  
そんとおもひつけて乃  
うきよゆいしるのゆひあ

ウツモ

長徳二年八月九日御堂歿

ノ時内々

辞大將同日以當六人爲隨身三年  
十月九日勅賜左右近衛府生各一人  
近侍各三人爲隨身但停童みち  
今葉の活潑もひゆひ  
もそのゆひすら  
まとうの葉木の色目不見ふ  
水テゆくやうあれど

沙勿と以て今もあらわす  
御臺石と人との事は、總て  
大久あり

の元より  
タ旁の事へ敏上一  
の所にて供奉

卷之三

今  
か  
ら  
ま  
と  
じ  
事  
業  
を

تَعْلِمُونَ

乃  
始  
有  
其  
事

うるまの  
うらわの  
うらわの

代始より八十鴻名を歎吸してあり、曲詩  
の如く御衣とぞらく參向して解説  
する事ありし事が歎吸の例

ニニ  
天皇  
御  
代  
也

卷之二

貢之可謂之  
貢也

蒙古文

内  
の  
外  
ま  
の  
う  
り  
冷  
泉  
院  
や  
住  
い  
川  
も  
寺  
院  
り  
六  
条  
院  
宮  
い  
御  
基  
不  
も  
よ

ئەمەن بىلەن  
ئەمەن بىلەن

斗文之書  
此乃一佛  
經卷也

卷之三

まくはりあつて  
わざわざとひそかに  
ゆきゆきとひそかに

麻宮の事は、  
ぬるやかでもある  
が、もとより、  
せうとうする、  
かくいふの、  
わざといふの、  
あらわすの、  
とある、

きくらぬうり

もうちをとくねもしとくわくかく

斎えよとくくわうりとくの

みとき

ひくぬ人もしやうくにきゆみかく

むとくわくとてけうう

ゑむくわりの家地うし

六象京柏キヤウコクとく

山まのつうあひた

詠承ちの八角ハクサクのとおとせきとくまとく

と秦シナの東山ヒタチヤマのちば境ヒタチヨリのゆゆ

紫シ上ノりこりのす

うく

印門インモン十一歲イチイイ秋アキ中ノあいすよあく

なまくら

並一蓬生

是のへどのまうそに物語の事  
はるか年とてや忘れぬまき  
生の宿ともゆる病むけり年  
源氏のサハの月の年といふとて換  
の年り

一この思ふをかうけめり

源氏の意アラモトナリ

なれどもよろこみ

すま女院東主となりゆくを

まつゆる

かとてうきて 用

ちに引よのけゆつま

計會されもよけ調度アリ

もう引もくもよのはのひもくられ

とよそ

きやし

世情ア本男こうしあわ

きとくすなり

つらうじよつ

貪家淨掃地とよそ 東坡詩あり

トハシタリモカニテ、シヒナセ  
トハシタリモカニテ、シヒナセ  
トハシタリモカニテ、シヒナセ  
トハシタリモカニテ、シヒナセ

今しつれ  
ありありまやうのあ  
あのほんせ  
をうたう種姓スジヤ  
カトガ  
あります黒わ  
あくしゆんとくもん  
今しおれりもとす

きつこましむかひあいがま様え  
のとそ君のさねと  
一九〇九年一月三日

侍は「大吉の姫の事」とうなづく  
うえに、お山の御みうき御八  
十八年うり承るのもよ有  
大吉をうけた

源氏の志この町へちやんとまわる所  
を考へてといつまづまづ

たゞのまへし  
おとこちやく  
しゆめ

事は  
御宿、ゆき  
かわのまくらと  
うてあつ

卷之三

源氏物語之二月乃向太陽

まくらをよみぎて

花ちり里  
かみのくに  
春あれひえ

الله رب العالمين

新樂府古塚机云大尾或作幻寥

孤の身をもとめ  
うれの夢ミスンをもせりつゝか  
あはとみづのくらんけやと

まくらうの時も尾とり夫の被  
こいつて書りとかよをゆんあとも

ひづれ

そなうねあらはるうりえじくすん  
三輪山すてねせじせばの我とさし  
お君のねえとさわれねばうあまほ  
と葉枝かいじくとまきにけり  
あくまとねうねふくまるともどた  
くしてあひうづくのゆき  
お前のうきとつねと宿のうきゆけ

ねとまくとつと上づけりむゑ  
めり又三輪のゆかの住吉乃四郎の本  
てうひゆまわり 指透り

住吉とせんやゆふねうやくまといれ  
あらうと住吉の本の御通宣とまく  
まくと三輪のゆかと御通宣の時のうい  
いあくせりとみゆかのくうへよ  
お詫事いうの、すうりやくし  
御通宣のとくとくうるどあく  
マノねじとくのうくうくうく

よみゆくとまつじゆかうあり  
そぞくあたまをねうてうるや  
てゆうて

ひ  
わ語りてあらうか  
う事いは一交せうる事也新叔子  
もあふと奥入り事とどく相違と利  
くの内中納きのわ語りて、仰りぬ  
ふとやせしゆきかとどす常陸  
乃まの事アリゆうわうりや  
あらうむちとどくともまいか

下家司シモヤシ

ニトセソリ、のゆえりあうちかく  
そぞりわらうの家アリ以ほりす  
けりそりのせよ詞也

並二

開屋

此詞爲卷名也堅乃並也並乃此志  
サハ累つまわみとはづくの春と  
八月の事トシテ御用こうすまも九月

石山寺の事と並列なり堅の並と

そりより

よろしくとひいぬ魂くらまゆ行く

又のとくちうらうありく

袖の奉りまつて御門くわしよゆ

きうのあくふく一帯陸ちうありく

下向をもよ

けく山と吹き月のあらわす

古今亭

ひのそゆ山と風と月とやまやえ  
けうるつうりのひやうしらりくよ  
れ事にいふかくわくわくわくよ  
ゆとけくねとひくよ

首をうへておうひゆ

スカラの袖

源氏サハ累帰<sup>ヤラ</sup>家のおゆく

とよ川

多のあさとくわくとしきぬいものう  
うえ

侍襖<sup>ヤリアラ</sup>もないわとくわくうとモレ<sup>ヤ</sup>  
文藏<sup>シリミ</sup>わと用うり一やうりむで<sup>ヤ</sup>  
もう先<sup>シ</sup>ゆとわ

かうひの小君つゝの右衛門のとくあ  
ふれんをむづくとくくのうのう

トボ

一月まどりとくとく  
かくまうあとやーと

御成ノ石山ノ七月奉観  
一日と又詞いひて命也  
日も山も山あは道よ身也獨り山也  
約束もいとぞ無事也  
天みやぢよしのうじとくわ  
宿也

空蝉之音清於玉潤

中車御を以て御事と申

新行の事、わんと清作

アフサカ  
相手の事やつまらぬ用のれんが、さうかねて

卷之三

之  
水  
通  
氣

蒙古文

辛亥年夏月  
王之春書

もと御よしりそくらん  
シテ

墨の條は四十

十二 繪合

繪合

松風

ム詞の巻名は繪畫集の羽よひみ内親  
王繪合の事より扇合雙紙合根  
合かとされうとりく詮考とせあり  
源氏の志す國の時より扇へ繪合  
三内うちとせ九葉の事の物語り  
不思ひきりや

前衛宮の御まつりや

六条御えどりてあり伊勢

もぬ京しゆく今幸サニ歳仰り  
十三歲リ如後

空きのうらやまわくこかとゆるゆく  
うちめりゆくのうらやむく  
髪とまくらにうらやむく  
名アもつあゆく

りくのうら葉リ

さくの舊食銀の荷物の舊方す松  
乃折枝鶴ホト時天曆三年歎寫  
印膳カムハサウエヌヨミ近代西本

也折枝の弓角よひにくね枝と  
そくとくまとじまとひて川うね  
とけうりてあくまわりこれんま  
タマトウタマトウタマトウタマ  
はまぬえつりてまどりてま  
はまぬえつりてまどりてま

割鉢キモトガモドモジモ中と被つた  
この舟主のひきもの朱雀院の舟在後  
ク時のやく拂歌アシカヒトモトモトニ  
もすゑのくへりもしきらす

と御門の御事あつたる所  
おまえとて御事アリとてうふまや  
と御のいきり行アリてありける  
こつよツシテモ繁よもせんざれと  
入社トムシテソラ  
わまき御すありエリノリキニ  
ええせまへ

源氏の御詫アリとありてゆえひま  
とああき御まうしわせ  
シナヤモ行アリ

カタシモアリモアリモアリモアリ  
ヨシモアリモアリモアリモアリ  
のアリシテモアリモアリモアリ  
アリモアリモアリモアリモアリ  
アリモアリモアリモアリモアリ  
アリモアリモアリモアリモアリ  
アリモアリモアリモアリモアリ

金きとわくらうやわんとね  
しづを

御門のゆゑにわくまきとまくらして

つゝとやうんとかく

うそりぬけりまよもくしてあとけりあまに

宋の徽宗皇帝好登け時登及かと  
あまわゆることにありて登て上りすち  
やうけりぞれけりうりほりまよし

との汝アリミテとゆく

えもくアリミテとゆく

えきさん汝アリミテ御門の

ゆゆせんとゆく

この御アリミテとゆくを爲ゆむ行へ申  
通ひ

齋主御のゆゑにまくはりと

御門のゆゑにまくはりと

むりあてを引ひりゆまれどしきもくとてとまくはり

紫の上のうさぎのゆゑにまくはりとて

ほぐのゆゑとてとまくはりとて

うそりぬけりまよもくしてあとけりあまに

うそりぬけりまよもくしてあとけりあまに

まくあきとひろむらにあふる  
とよかまつ

梅つやのむら

承また女侍の梅童タミよもすね  
ふくらのうりくわじとまきうら  
てひらりあくまきを落

鈴合スリガを二度あわくうれきりめり梅川

やの御ミツルくうちくわじとめ結ミツルりわく  
らまうらほのと御殿ミツルくめの女侍  
とうきの女侍とのいとわせ

ゆきや

梅つやの浦ミツルくわいとめ侍臣ミツルくわい

かづ

天浦ミツルくわいとめ衣典ミツルくわい掌侍ミツルくわい  
かと方人ミツルくわいとめ結合ミツルくわい

例ミツルくわい

そぞりのたけ

万葉十六行ミツルくわいとめ扇ミツルくわいとめ  
わ清ミツルくわいとめ遠ミツルくわいとめ  
ふとくわいとめのとくわいとめ野ミツルくわいとめ

とくらへひげかうりひるす  
一もらわうしれこすもりうんへ  
ううてゆうこむくうりいし  
うとくとくわうらあうらあうま  
うとくやのくまくまくまくま  
みちくうこくまくまくまくま  
ひくつをいせいのめうそはい  
せきれうやひうのくらう  
くくはくわとくわとくわとく  
のほくへゆくへゆくへゆく  
うれくへゆくへゆくへゆく  
くり佛名のくらを行ゆく  
うりうてみくり蓮葉の山へゆく  
ひと称くへゆくへゆくへゆく  
とみくへゆくへゆくへゆくへゆく  
ふ大称のへゆくへゆくへゆく  
太御もくへゆくへゆくへゆくへゆく  
ふ玉えくへゆくへゆくへゆくへゆく  
とくへゆくへゆくへゆくへゆく

てひく／＼ぬ／＼か／＼ま／＼れ／＼お／＼け／＼れ／＼ろ／＼  
とい／＼ま／＼ね／＼と／＼く／＼お／＼て／＼う／＼こ／＼  
け／＼や／＼

ぬ／＼ま／＼そ／＼れ／＼き／＼ま／＼お／＼せ／＼け／＼  
と／＼ひ／＼く／＼つ／＼お／＼じ／＼わ／＼り／＼も／＼  
め／＼の／＼そ／＼い／＼す／＼く／＼ひ／＼れ／＼す／＼  
い／＼し／＼く／＼き／＼せ／＼と／＼む／＼こ／＼と／＼  
を／＼あ／＼そ／＼く／＼と／＼く／＼わ／＼い／＼ゆ／＼  
は／＼ん／＼や／＼け／＼ど／＼と／＼ゆ／＼わ／＼く／＼  
て／＼た／＼の／＼ゆ／＼う／＼ら／＼く／＼く／＼ゆ／＼よ／＼  
あ／＼も／＼そ／＼り／＼わ／＼く／＼と／＼よ／＼く／＼  
く／＼ま／＼や／＼く／＼の／＼み／＼人／＼つ／＼も／＼く／＼  
あ／＼も／＼う／＼れ／＼

久代より  
カミノヨリ

大林

トヲハシ

東坡詩云

トヲハシ

水蚕不知寒 火虱不知暑

ゑもせづり

巨勢相覧者

金

金是寛

ベイノキニトタリ  
ツラギトヨミトキ  
平時人有らず則一  
人貫之同時人

九月廿二日

左右芳  
香也  
自風  
來

よつてのわくとむづとい  
正三位のゆきの事へしや  
代りつゝも平内なるの方人

大  
の  
き

右宣八大家之民  
公之

實のよき事の如きはちじくの傳と云ふに及ぶ

のむかしのまことに  
はるかにわざわざ  
おもむきにあらわす

このまゝ、併河也詔より之併河の御わ

三  
四  
五

アラウトモニキテ年使しソセムアキタヒル  
シテゆりぬクハアリムトスメツナ  
モトキヌミトサイクノ  
モトキヌミトサイクノ  
ケムシモトサイクノ  
ケムシモトサイクノ

エラスムス

卷之三

ひりあねりはひとくのせりの紙

くよみゆといふうり

又ヨリ御世のまことをセラフミに

えい朱雀院ヨリ御代りわざ  
さうつやの御門のをセラフミに

きよみゆといふ

玉のこひくひくひくひくひくひく  
日ノトスシテん志

依ルホ

サヌク御下向の時大極殿ノリ  
幸うりて到クタヒウカツサヌク

内都ノ内侍清事ニ拵つやひ御北

御うちの侍ミ朱雀院ノリカヒ  
キムモヒムモヒムモヒムモヒムモ

ヒムモヒムモヒムモヒムモヒムモ  
ヒムモヒムモヒムモヒムモヒムモ

タヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタ

のこぬふと

絶リ遙く沈の音と沈の音と遙  
ひ密リアラシナリや又沈とアラ

まことに思ひに先づ  
心葉もくらみり梅をも  
とあざれどもうとく  
すむやてもくらみり故と焼の  
さうの落の心葉もくらみ

男をじうゆかひのめのうちと  
朱薙院の御つゝ齋宮の御の内行  
とやうわうつゝうり

しの御んまつりとつりてうりて

楊貴妃のうんまつりとすりと方より  
ありとくわ我附太上皇とひてまぬ

とぬと思ひせり朱薙院も里

太上皇ゆきとすりて

志うらへ音ひがひじて神代のとすりと高き  
うちの拂とけむけ音のすりわく神代  
すまめとすりし時乃半寒（ミ  
久院の御うひうちのやうとあいじき  
ちうるるのうじよみのア

もじゆくとて御じらりやむる舞

勝月夜の尚ほ舞事とづ

せのひととくとく

三月廿日よりて折りやどこう未段  
とて御膳会

女房のまつりあまくとくとく

女房のまつりとくとく齋盤所とくとく此

繪合の御裝束の天酒三幸とくとくす日

肉裏秋合と持ててとももゆき清

涼歎の西の底りも有じ事、臺盤不

立拂倚みあの方と間ある方女房、産小二うむ太方産酒處南小妻ゆ。湯  
登るらぬ産酒處涼歎置みるは月産  
うちあを記りりとく

わそんのくにとくとくの京とくとく  
えひううううのまく

天酒う合ひ方例酒紫檀机蘿苔下  
札此も清疋麦ちこ今來りす酒玉檀の  
菖よかく蘿苔もよてけく花足

よもゆみ下はるあそびのあまわ  
じこみのこひくまうわらうき  
いじくとくへあうりまうきあら  
陶漆のうれ縛てて酒トツのとくぬゑ  
めんとくりてけうてしきの  
絹イシヤクとらきとぞり

よもよみつうりほく、まのうくまわ  
うくれおせゆらうねのうりやうり  
わ、えのくまにく、りぬのまく  
せむけうち、くねくねアラメ袖こわこせ

ニモニとまゆわ

あらんかくとくせんくの下はるあそ  
きわりうてこくのうきあしゆじはく  
あらくのくえかといまう

天德被合右方別腹スミモツクニカラノタツクマサ  
縲波文藏物地敷シテ今案右方絆マツ沈  
のくよつあらあらはつまうくされ  
すまうくとくふあくくはくれ  
がくとくんくの沈トツあこくとよ下  
れとつまうくうき下川カワくゑ

小えり、うきわ波の、海のうねれ  
さわゆひのひのと、たどりてみゆく  
くもとつやじめりのまのうして  
結ゆる、あらうかわうむつる、  
座の列賓を況浅魚と用ひうらき  
あそぶとありえりゆでめ  
さきりいとう、かくらうめ  
さあすよ都のうみうとい乃、りゆ  
のあこせん

あどよのうみに都のうみ紅梅まの

袖とまくらや河内またてうへあ、色右  
わとあく年は袋赤りかくらうとそ  
今棄ちきたうの赤あへぬうき  
とくもううれ又は、唐ふ右を高  
篠ふりへくらりや  
うれふ房もとくまうへとくらりへりき、  
うの木房と、興は掌ぬそよを、おも  
まくろとづれしわ、色あくらうて  
あくらうとづれしわ

みゆく、うれありく山水のゆくをゆく

えふと書くをけくわやうれ

紙とづかへて來るのやうに  
とくへゆきと山のつぎと  
とくをほんとうに上り詞中  
猶さむうのんがとこのはせりへた  
まこととあきの紙とくらんのば  
とよしや抜き才九羽庵<sup>ニヤ</sup>と  
すうちばしげひけふとちり  
のちくらうもじのわくもうちあ

とくと山あひゆくあつとゆく  
紙とくとものとくあひ葉てとくひ  
あらぐ今のかくはうもじの徳

可つとくらうも

わきわくかくはくしわあくゆまくわ

くらうも

胡<sup>カク</sup>いのすれ津<sup>カツ</sup>みとわきてぬ<sup>ミス</sup>

とくとく

むすりりうねうじりわくそ

物<sup>ヤス</sup>ノ貞<sup>サニ</sup>持<sup>リ</sup>わや玉<sup>タケシ</sup>守<sup>ム</sup>

月、金銀萬枚と御清よもててす  
一の前よりまつあづけりぬすと  
まちうや

ひうちれよなむね

三はきふくわぬカチヤス貞れ

三あたゞじゆれても今もまし

未りくす

三あくまみ今さくとく今が  
お詫かへらひのとゆくがなじういの  
ちとまのひとかぬ事ハタシとまくま  
やうと音と半あうてりんまいりこ  
とくへゆひへりこのとふらくにれぬ  
うたともなうてえどくらうてくよ、  
そく、繪ハナとまてこのまくはくく  
よいあくまよあくまとほのゑて  
こゑくわりりやうせきとまく

葉くみちと春内半ハタシ

暮トクハ東坡もと不候つ一よどす  
文才のひ、物くいとくうのひれまに  
いさんひゆたまくまく

文才、手上の藝能、うしもやつへつす  
及とうのほ、ひ管絃の道アリモテ  
益々うんとあり、本朝  
源氏の君の高道法藝、ときには事  
を曉得の一せり源氏心を大に信ふ  
の份とうてソヌ

あらこひよこひや、うす御と

御歎ウチしきなまくわざの  
日ひあくわづかう、うめり

うんのじきうそ

李邦玉記承平二年新嘗會勅旨  
書司ミ、称唯仰云御キ奈良之  
万る礼書司即取朽女、僕琴置之  
御前、今案物合の候よ  
す、おあり書司、女官の君、和琴  
とは、も、う、くわせとどもやそえ  
うて、も、と、と、お、お、お、お、お、お、  
つ、つ、つ、和琴アリ  
も、も、も、も、も、も、も、も、も、も、も、

御歎ウチしきなまくわざの  
日ひあくわづかう、うめり

うんのじきうそ

音助付奇ノテ酒方食  
肴有沛拉雅信胡王拍子侍臣  
召人小候之

燕のゆよのひまア魚糲もいた  
うすうのゆくとぬわゝへる  
きの鳴合ノホルの志せん  
とくられの中えりりゆふ  
く上ノ詞ノ中えりりゆふ  
みそくつてもやへるもな  
き一帖テラつもすりもく  
あ、アカヒメアリ  
カミハマリセトヘルヤセリ  
ノ首尾相叶シテアベキノ詞

よろしくうえのうりやまくす  
一かゆうとあり、し、  
こゆうのとぬわのものもります  
えりつまてゆくのを、

おゆゆるとゆの人のひづれ  
世へくまに延びて廣の聖代とい  
ちりの冷めぬとこ廣の肺で  
有らむ行々繪合の倒りひまふ  
天國のうちもはうせの事

ゆうゆう御嘗とくらへく幸ね風  
りもありとあり大井の幸ね風と  
あらうひもとくまに延びたうよ

十三 松風

詞 手稿の春右源氏す葉の手稿  
五あくゆ同手稿

ひぐの院以うてこれちふことま  
え

山中春右の東院はけくわされうり  
さかうニ除東院とけくわくも  
れきとうれしひにまよへ東院はく  
ともくねたお里うしろたまく  
可住まゆるのうてひむのまくみ

えもあひ東院へりせとよつじる  
つとよつてとよこよりゆく  
まやうわらく寝夜のよもよんに  
河ぬい続ちやすれど紫ともとしも  
ニキハのあら封ノリ往きテ東院の  
三姫と源氏の山基所ノリんわく  
あまゆつ下すとよもよとよも  
あらとよどふ

ひくひく毛のぬからや勢えとよく  
脱破拂み中勢つ兼明取毛山底を大

升川畔号雄為殿<sup>キハシ</sup>ひ朝毛とゆふとの

母君の祀文とよむ

あくまより内のりがわゑびへり行脚  
雲らしく

繪合の毫のまよひくつしゆぢゆ御  
堂<sup>タラ</sup>棲霞寺<sup>セイカ</sup>思ひそくひりがに大  
くのあくわうりぬとトアリム  
ゆり棲霞<sup>セイカ</sup>古<sup>トヲル</sup>寺<sup>サニサラ</sup>の山底<sup>シ</sup>  
後<sup>アフ</sup>りゆううりて棲霞寺とよほまれ  
清涼寺<sup>セイリヤ</sup>の東<sup>アリ</sup>わらふとぞも

セイリヤウジ

也清涼寺へうれ西より歸す

小野玄右衛門永近元年八月十八日

は橋上人位奇然申清玄以毛太山

号五基山大清涼ちよ建立一伽藍置

自稱檀釋迦尊像も此天也奇然

入唐してわざも佛也清涼山寺

と以名ひしりありあるより貞觀

七年の國史もみくらすま神も記

こまくは棟焉も釋迦堂ともぞう

奇然渡へゆるもやまと人せ言も

あめーせひりやけあますて不冷清涼

寺とよもとわわりけ山中も奇

お別り一堂もちくニ傳ひ尺也とあ

置一もすりや

もつたりの志り中路もすて

兼明報も長男伊歩中納ニ署伊行

従三位上春官字古氏詔大浦もと並

親王文少世ノレシテノクハニクミ

こうゆうゆくのう御門よりもくもく文と

いくとれど御尋りり！伊歩

やけりてすわもまつますうさ  
きのうへ衣ふて候へとやまく  
らしきふとおとねまつせよ即ち  
さんわわいの老矣賦トキラノ賦トキラノ成す  
えまう老の字トうと赤トすと  
子にうちきれいトしめらす申  
けりうづくへ賦トキラノ賦トキラノの申よもあき  
か祠トキラノあり老トキラノ昏トキラノに説トキラノト  
一もみこせりとくはすのうらわ  
りさんんの爲トキラノとくらわ  
とすりに申候トキラノ  
奉ミジコとひらりあへり  
奉ミジコハ文書トキラノの事トキラノ  
けりせ居仰トキラノはあくトキラノのみあくトキラノわくトキラノ  
て御殿トキラノのんとくとトキラノとくとトキラノとくとトキラノ  
大光明寺トキラノは焼樂院サカノとすら燒樂天サカノ  
首目トキラノ同放トキラノ地トキラノ勝負トキラノ泉トキラノとす  
かく大光明寺トキラノも罷トキラノあり棲霞寺トキラノに  
もあくにじめて心トキラノとくとトキラノすると  
一うちかとじむと

れをうつしもつとおなけり

もと大井の里の事

まつまつ人づけうきのひづりれ

の名のうのじつて源氏の志の山もす

のそととおとくみかん

源氏志の山ゆめくわんとくふ

まつまつ人づれ

みうと本くわんとくあとよ

あきあきいぬりあぬ

うる休のむらじひとすまはましおひ

そなまの歌うまくわうへ

あてゆくひづりれ

明石八道車

まちやかのそまみのじの福井車の道よぬとつん

りうみよかとむへゆる入の福庄ちりぬ

てくわく一時の車く野中の野の清あわせ

あらまほとすりや

せあとくにうひう令かと思ふゆま

あましりやの入道のすゝみりやう事  
わからせば思ふらむにあらまめも  
なりてうれどもやうもだらかをひくわ  
のとと思ふまづゆうりやうりやう  
あましりやの入道のすゝみりやう事  
あましりやの入道のすゝみりやう事  
あましりやの入道のすゝみりやう事  
あましりやの入道のすゝみりやう事  
あましりやの入道のすゝみりやう事  
あましりやの入道のすゝみりやう事

ゆきとくとくのとくの風とくとくの  
明石のとくのとくとくとくとくとくと  
八道のとくとくのとくとくとくとくと  
八道のとくとくのとくとくとくとくと  
あ

地獄餓鬼畜生と三途とよ隋羅とがて  
はて遊とる人ことをくく六道と云ふ  
途の三惡道

じい人をあくびとつひひ浦の那廢をだ  
まひまうり

ぬるしゆふとそ思てうづくらす  
中身りわくへんてのやうにうな  
もくえふのりう舟のよ  
ぬくものうかく思みやうけの  
み細ひうど

卷之三

あらわの家源氏の志の  
のえんと門うきと車とどりも  
やまかくふうれいとくじ

卷之三

あはれのせんじゆもじゆ

蒙古文

，而爲之也

水原の酒  
の酒を

蒙古文

卷之三

詠しや奉るわゆふとのよわ  
えのれくすくうづきあそひたよ  
つらうさりかひじゆのゆび

ひやうりもあたこせの人のよしやどく御  
くふうんとせり今いもせうて  
くふう人志はひまうりくと  
山入のうとくと伊勢造サヲみの  
うんとすとあわわれもね  
のうとすとすとすとすとすとすとすと  
またのうとすとすとすとすとすとすとすと  
せんまのうとすとすとすとすとすとすと  
れに大井の里です  
あとと  
ひととくとくとくとくとくとくとくとくとく  
首もあら立石かくとけうひうとく  
ひの西新もあら立石かくとけうひうとく  
あとと  
ひととくとくとくとくとくとくとくとくとく  
は一段のうとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
きゆうとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
ひおれゆまのうとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

わゆるむじのまへとあれども  
へそりのふへよしとせんうへ

くとや志アシテリ

あらゆるゆいと

是あつひむうゑの母ヒメとあらゆるゆいと  
と早下ハヤシタて尼ニシムクとませい高タカき

脇ハラアソミのとよツ

みのとよツ

五角ゴヨク觀クン天延テンエン二年八月十三日泰山タケサン

祈水祭ミツゴイナミ又あり海シマのせとシテ小倉ヲカラ

山タカハすと草タケのやにうのもの徳タクあり  
うお祀オモリアモアモウ

赤アカゆ

かくゆきくらゆカクキクル  
とこちくはくみのとよツ

うきうきゆくゆ

いざるゆくゆとよツイザルキクル

わくわくこくゆワクキクル

御よりより行く

テアキラワイテ

李部王記天慶八年三月廿七日寅明就下  
棲霞寺新堂修先室藤原氏周忌法會上  
安賈金也等身尺迦加來像一祚

同記棲霞寺天迦堂三僧法花三昧六僧

供料稻七千束丹波播磨國加奉ノ事

奏請之永代長誦三昧と行トノ事

今之物語ノ常行三昧と云ふを

恩とせよモ

内のあるモアリヤウモ

大井里より往く所

其の外の事の多きをそむかんのりとぞり亦や

明石巻こう称する所これノ事す

あいさんと女房りうちゆきゆき

ぬとのそとへておつてこ

ゆあらうねと身小わざりくもねおうれ

あけうねひしきのあり似る

もうまたまく女房りうちゆきゆき称す

ゆあらうねと身小わざりくもねおうれ

内のあるモアリヤウモ

思ひ出でて  
うれしくへりこの頃

卷之三

解宿ちう待  
意人今紙のち  
守り候

今  
日  
之  
事  
也  
不  
可  
以  
不  
知

彷彿

えよりへ良き、  
の石の上  
か房了

アラタニシ  
アラタニシ  
アラタニシ  
アラタニシ  
アラタニシ  
アラタニシ  
アラタニシ  
アラタニシ  
アラタニシ  
アラタニシ

是れを高麗にて、宣明の  
事のよきをもつて、この本と  
あわせ、今後、より多く  
とくべつにあつて、  
しれぬものわざをうけ  
りる。

よりやがと思ひたゞりとあらへん

是の又良清ヨシキヨ

けりうてひせうる處カタマリ入のせよ  
いれじへむいきうしゆまをす  
わくまうむやく今より

ソトモハ宿泊ヤクボか房カハリ

トフノキウミヤウ

从中將トフノチヨウおも智ミツ

此二人を系ツイツ勧アシツひへ

まくまの爲マツマノマサニ

儲物ヒラタモノカツナモノ

用意ヨウイをなうめう利

リキミヨシまちきこほつへき

ひそくへえとみのびとは君ヒメひを

とお思オモシむあううり併ハタハタしきして

アキヒトとよおうもうよゆう時セイ

柔中ヨウヂのとせはまう時のとせまうにも

もううなまゆりうわよ

ううきくのひうつ引ハタツ行ムスやううのめわモウ

明石奉アマニとすあつらの爲マサニのわん

りとほどのまことにありてゆきりくわら  
のよしれあふとやはとくとくゆく

右太家とうとうして

カウコフ

コニシト

此年源氏の君の月歎<sup>カウコフ</sup>を雨原人  
ノうじら一時の今とえを捕<sup>ヒグマ</sup>りよし  
りぬりうちへるがたに<sup>ヒガト</sup>停<sup>ハス</sup>まくは成  
ノ高麗人<sup>カウ</sup>相<sup>シ</sup>り行<sup>ハシ</sup>、七罪の河<sup>カウ</sup>  
ノ<sup>シテ</sup>よせ咸<sup>セラ</sup>りうりゆり<sup>ハシ</sup>り<sup>ハシ</sup>  
て御<sup>セラ</sup>る<sup>ハシ</sup>と昇<sup>セラ</sup>進<sup>セラ</sup>セ<sup>リ</sup>  
ちと年<sup>ハシ</sup>とあり<sup>ハシ</sup>幸<sup>ハシ</sup>いと<sup>ハシ</sup>と<sup>ハシ</sup>

ゆり入<sup>ハシ</sup>左太年<sup>ハシ</sup>とわ列

雪<sup>カウ</sup>の<sup>シテ</sup>とむく極<sup>カウ</sup>月<sup>カウ</sup>引<sup>カウ</sup>の<sup>シテ</sup>新<sup>カウ</sup>と<sup>ハシ</sup>あん  
河<sup>カウ</sup>きの若<sup>カウ</sup>と<sup>ハシ</sup>新<sup>カウ</sup>の若<sup>カウ</sup>と<sup>ハシ</sup>ゆり故院崩<sup>カウ</sup>

即<sup>カウ</sup>の<sup>シテ</sup>と<sup>ハシ</sup>と<sup>ハシ</sup>

ものと<sup>ハシ</sup>と<sup>ハシ</sup>と<sup>ハシ</sup>

大井<sup>カウ</sup>もりぬ<sup>カウ</sup>も<sup>ハシ</sup>く<sup>ハシ</sup>ま<sup>ハシ</sup>けの<sup>ハシ</sup>ゆ

音経<sup>カウ</sup>と<sup>ハシ</sup>と<sup>ハシ</sup>と<sup>ハシ</sup>

近<sup>カウ</sup>あ<sup>ハシ</sup>と<sup>ハシ</sup>の<sup>ハシ</sup>と<sup>ハシ</sup>の<sup>ハシ</sup>ゆ

中山大将儀<sup>カウ</sup>補<sup>カウ</sup>物<sup>カウ</sup>官<sup>カウ</sup>事<sup>カウ</sup>物<sup>カウ</sup>節<sup>カウ</sup>争<sup>カウ</sup>中  
サ<sup>カウ</sup>相<sup>カウ</sup>共<sup>カウ</sup>於<sup>カウ</sup>陣<sup>カウ</sup>產<sup>カウ</sup>定<sup>カウ</sup>補<sup>カウ</sup>先<sup>カウ</sup>成<sup>カウ</sup>府<sup>カウ</sup>生<sup>カウ</sup>養<sup>カウ</sup>

付殿上少將臺肉後今人給上卿  
下兵部近例若常參人次乃付  
人云く次中將执筆定書番長以下下給  
將曹依次召立称唯進立再拜  
今棄物節とつもと承會人の中アリ  
東遊よひゆふかやと物節と稱す  
ノ中よ番長府掌ホモトモにいりて  
春日祭賀度參ノ使の羽林東を近  
おナ人召具之於社頭永子波川草トモト  
舞之セ陪役ハ府生加陪役も近衛の  
官人之陪役も和琴笛ホ促之賭ラ相撲  
のちね乃還アドの時もみか玉社有  
リ也故の役ありうのは、神乐の人長  
石人久も近衛今人モトヒシリウアリ  
セのサアト馬長とソレ近衛中清善  
トモトソラウウリハ長上とツヒムヒ  
日アト當とシトとあとモ  
ハリウキナリモトモツモ

思すアリハモトアトモのアモトモ

えと紫のこれ何と思ふ事と思  
うるをもあう御へるの事と  
うるをもあう御へるの事と

たがくの笑うておらぬあられ  
とかとしのわくわくわくのやゑ  
思ひうり

Market

Wood connection

Worship arrangements

